

妥協の先のヒーローアカデミア

璃璃色金

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

世界の総人口の約8割が何かしらの能力”個性”を持って生まれる超人社会

そんな世の中に生まれた存在

個性を悪用する犯罪者それを敵と人々は呼ぶ

逆にそのヴィランを個性を使い取り締まる者達それをヒーローと人々は呼び憧れる。

これはヒーローの父を持ち、父に憧れた少年の人生録

目次

第0話：ヒーロースタート？いやいや身体動かすなら準備運動から。 ここでつまずいてたら話にならないよ	1
プロフィール	4
第1話：壁を乗り越えるためには、準備って大切だよ。さあ情報収 集の時間だ、耳の穴かっぽじってよおく聞け！耳が壊れるけどな！	6
第2話：壁さんよお相性が悪かったみたいだな。ここは通してもう ぜ、たとえその跡がどんなに汚れていようとな	11
第3話：あんな汚れた過去は俺には存在しなかった。さあ、ようやく スタートラインだ、準備はいいか？Take your mark!!	15
第4話：新入生代表の挨拶あるじゃないですか？あれ俺の所に来な かったんだけど誰が読むことになってんだろうね、即時対応がヒー ローには大切とかで急に読めとか言われないよね？	21
第5話：己の限界を把握しろ！知恵・体力すべてさらけ出せ！何なら ついでに限界超えてみせろ！体力テスト改め個性把握テスト開始だ オラアア!!	27
第6話：入学2日目、ヒーローが勉強教えてくれるんだって。憧れの ヒーローの授業なんて興奮しすぎて頭に入ってこないんじゃないか ？	37

第0話：ヒーロースタート？いやいや身体動かすなら準備運動から。ここでつまずいてたら話にならないよ

世界の総人口の約8割が何かしらの能力”個性”を持って生まれる超人社会

そんな世の中に生まれた存在

個性を悪用する犯罪者それを敵と人々は呼ぶサイラン

逆にそのヴィランを個性を使い取り締まる者達それを英雄ヒーローと人々は呼び憧れる。

目覚まし代わりにスマホのアラーム4件+目覚まし時計の音で少年は目を覚ます。時刻は6時。普段が8時起きの少年からすると、もうひと眠りしたいところである。しかし、今日は少年にとって今後の人生を左右する大切な日だから早く起きた。

顔を洗い、リビングに行く朝の準備が済まされ、コーヒー片手に新聞を読む父と朝のニュースを見ながら弁当を作っている母の姿が見えた。

「おはよう、父さん、母さん」

「ああ、おはよう。」

「おはよう、理。そろそろ起きてくると思って、朝食の準備は済ましているわよ。」

「ありがとうございます。」

今日の朝食は、和食でメインはとんかつであった。試験当日としてベタではあるが、寝起きとんかつとは腹に来るものを。と、思いながら食べ始めてみたが、豚ではなくテンペであったようだ。ご飯が進む進む。

そう思っていると、父さんがネクタイを締め、出勤準備しながら聞いてきた。

「今日は雄英の入試だったか？勉強はいけそうか？」

そう、今日は雄英高校入試の日。雄英高校とは人気No. 1ヒーロー『オールマイト』並びに父さんがサイドキックをしているヒーロー『エンデヴァー』を排出した実績ある学校である。ヒーローを目指す日本全国の中学生の憧れの的となっている名門中の名門でもある。そのため入試倍率は驚異の300倍、生半可で合格する所ではない。

「どうだろう、やれることはやってきたつもりだけどそれは皆も同じだしね。僕にできることを精一杯出してくるつもりではあるよ。」

「うん、しっかり現実を見ているな。その調子ならいけるだろう。それじゃ、ちよちゃん、理、いつてくる。」

「ありがとう父さん。いつてらっしゃい。」

「いつてらっしゃい、あなた。ほら、理も早く準備しなさい。遅刻したら元も子もないわよ。受験票も忘れないようにね、部屋の枕の上に置きっぱなしよ、鞆の中に筆箱も入れ忘れてるわね。あら、靴のかかどが、もうボロボロじゃない、試験が終わったら靴も買いに行きましょ。」

父さんが出ていくと、母さんの個性を使った持ち物点検が始まった。我が家の毎朝の光景ではあるが、高校入学するにあたって、そろそろ自分もしっかりしなければいけない。そう考えた15の冬。

「分かった、分かったよ母さん。それじゃあ、電車の時間もあるから僕もそろそろ行くね。」

そう言っつて、僕は準備を始める。母さんに言われたことは多いけれど全部なければ困るものだ。探す時間も省略できるから正直ありがたい。

身だしなみを整え制服を着て理は玄関に向かう。

「いつてきますー！」

これは、僕が最高のヒーローになるまでの物語。

「理！お弁当！」

ヒーローの道は前途多難なようだ。

プロフィール

世野 理（せの おさむ）

個性：干渉

無機物を、任意の状態（気体・液体・固体）、方向に変化させることができる。ただし、個性によりできた物、他人の個性が付与されている物には干渉することができない。条件としては、言葉でその物質と望む結果を言わなければいけない。例「鉄：粉末化」「鉄粉：右へ」個性を使いすぎると、血液の流れが止まり始める。体積の大きいもの程反動が大きい。

初めて個性が発現して使い過ぎた時に、心筋梗塞で病院に運ばれた経験あり。

しかし、倒れた時の記憶が衝撃で忘れてしまったため、ノーリスクで個性を使っていると自分では思っている。被害をゼロにできる父というヒーローに強い憧れを抱き、ヒーローになりたいと強く思っている。合格したことで父に教えを請いその中で自分の個性のリスクを自覚し始める。

折寺中出身であるが、爆豪、緑谷とは別クラスであったため、顔は知っている程度。父の仕事の関係で焦凍とは幼馴染。エンデヴァの焦凍への訓練が始まるまではよく遊んでいたため、雄英で再会できたことがすごく嬉しい。

画体：コードギアスのルルーシュ

特徴：普段は丁寧な言葉を心がけているが、熱中し始めると碎けた口調になる。素はどちらかと言えば後者。そのため、後者の方が思考速度は速い。

性格：少しばかりリアリスト、しかし目標は大きく持った方が向上心に拍車がかかるといふ点から夢を追うことは嫌いではない

両親

世野 包（せの つつむ）

個性：包む

理の父親。あらゆるものを30m四方の範囲で包むことができる。

敵の無傷捕獲に向いていること、路地裏など狭い範囲で関係者以外に被害を出さずに済むことから、エンデヴァのサイドキックとして働いている。

ヒーロー名：ラウンドラップ

エンデヴァ事務所創立当時からいる古参でありながら、事務所内での初見捕縛率100%、ヒーロー活動中の被害総額0円を誇る。エンデヴァの影の立役者として事務所内から一目置かれている。息子の個性から、理にはあまり無理はしてほしくないと考えている。雄英高校に息子が入学することが決まってからは、できる限りのサポートをしていこうと考えている。妻をちよちゃんと呼ぶのは無自覚。

画体は黒子のバスケの青峰大樹

性格：口下手（仕事は除く）

世野 鳥目（せの ちよめ）

個性：バードウォッチ

理の母親。半径1kmを俯瞰して見ることが出来る。ズームするほど見る範囲も狭くなる。エンデヴァ事務所にて、事務職兼チームアップ時には後方から情報収集して、ヒーローたちに伝える要にもなっていた。包との結婚を機に退職。専業主婦となる。1人息子の理の事を常に気にしており、心筋梗塞が起きてからは理が自分の知らない所で死んでしまうのではないかと怖くなっており、家の外では個性で理の事をよく見るようになっていた。最近の困りごとは、息子のナニをしている時を見てしまったことからプライバシーを考え、そろそろ息子離れをすべきなのか悩んでいる。夫には個性で息子を見ていることは言っていない。雄英高校入学にあたり、息子を見続けるか否かを、高校生活の様子を見てから決めようとしており、そのために雄英高校近辺に引っ越すことにした。

プロポジション：コードギアスのC・C・

性格：ほわり

第1話：壁を乗り越えるためには、準備って大切だよね。さあ情報収集の時間だ、耳の穴かつぽじってよおく聞け！耳が壊れるけどな！

弁当を忘れるというプチトラブルはあったが、雄英高校最寄り駅に到着。すでに雄英の校舎が見えているから、迷わずに学校まで行くことができた。オープンスクールの時にも来たけどやっぱり校門でつかいなあ。

「大丈夫、成せばたいい何とかなる。」

そう自分に言い聞かせ校門をまたぐ。いや、またごうとした。そう、またごうとしたんだよ、なのになんでタイミングよく後ろから何かにぶつかるの、なんなら後ろの何かも一緒に倒れてない？共倒れとかマジ勘弁。そう思い、おれは前に腕を突き出し、地面に腕立て伏せの姿勢になることで事なきを得た。

「頼むから、前を見て歩いてくれ。」

そう言いながら、振り向くと同じ中学の奴が手足をバタバタしながら宙に浮いてた。どういう状況、これ。あれ、よく見たらこいつ緑谷じゃねえ。こいつも雄英志願だったのか。

「大丈夫？ ごめんね、うちの個性で助けちゃった。やっぱり転ぶなんて縁起悪いもんね？そっちの子も大丈夫？ごめんね、私の個性手が触れないといけないんだけど、少し間に合わなくて。」

「あ、ありがと……その」

「それよりお互い頑張ろうね！」

すると女の子は先に行ってしまった。

「緑谷くんも雄英志望だったんだね。」

「ふう……！あ、世野くん！きみもなんだ。かつちや……爆豪君も一緒なんだ。」

「爆豪もか、俺達全員受かるように頑張ろう！それじゃ、俺も行くとするわ。」

「うん、おたがい頑張ろうね」

そういつてから、筆記試験会場が別々だったようで緑谷くんとは別れてしまった。

筆記試験は終了し昼休憩の後、午後から実技試験が始まる。筆記は特に問題無く終わった実技はどんな事をするのかそう考えながら食堂・・・は人でいっぱいだったから、外のベンチで母手製弁当を食べていると・・・

「ここ、いいかな？」

前から声をかけられた。

黒髪の短めのボブカットで耳たぶのコードが特徴的な女の子だ。

「ああ、どうぞ。誰も使ってないし」

「良かった、もうほとんどの席が埋まっていき。」

「だよ、倍率300倍は伊達じゃないよね。」

お互いに笑いながらご飯を食べ、ご飯を食べ終わって一息ついていると女の子の表情が少し硬そうに見えた。

「緊張・・・してる？」

「はじめはロックに決めてやるって思っていたんだけど、ね。直前で緊張しちゃって」

「俺もなんだ。なんだろうね、場に飲まれたって感じなのかな。でも、この緊張は皆感じているものだと思うんだ。」

「皆が・・・。そうだね、こんな感じじゃ当たり前かな。」

「そうそう、それに俺の憧れのヒーローが言ってたんだけど、『困ったなら喜べ。それは、自分にとって進化する機会が与えられたんだとな。』って。だから、おれはこの緊張をあえて楽しんでいこうと思うんだ。そうすれば、少しは気が楽になるしね。」

「進化する機会・・・か。うちには難しいかもしれないけど、こうして話をしたら少し気が晴れたかな。」

「だとしたら、俺は君の心を救えたヒーローになった訳だ。」

「ぷっ。何それ？でもまあ、ありがと。」

「いえいえ、どういたしまして。」

話が終わると食事前と変わって、女の子の表情は少し晴れやかで

あった。

「これから、実技試験の説明をしますので、受験者は講堂に入ってくださいーい。」

「さて、それじゃあ午後も頑張りますか。お互い受かったら、よろしく。俺は、世野 理。理って呼んでくれ。」

「理ね、うちは耳郎響香。よろしく。」

そうして、俺たちは講堂に入り一番前の席に座った。

そういえば、爆轟と緑谷どこいった？

——講堂にて

説明教員らしき人が出てきた瞬間、俺は一番前の席に座ったことを後悔した。どうやら、耳郎も同様の表情が見られる。

「今日はオレのライブへようこそー!!!」

そう、何を隠そうプレゼントマイクである。だがしかしだ、

試験説明その第一声がこれだった。ここは、こう返すべきだろう。

「Yeeeeee a a a a a h!」

横の耳郎がギョツとした表情でこつちをみている。言っただろ？この状況を楽しむって！

ボイスヒーロー・プレゼンマイク、受験中に聞いていたラジオで大変お世話になった覚えがある。音量を1にしなれば、母からフライパンが飛んでラジオが壊されたのはいい思い出だ。しかし、あの時のフライパンって圧力鍋にも使える結構重めの奴だったよなあ。一体どこからあんな力出せたんだろう。母さんの個性は増強系ではないはず。

「良い返事をありがとな！受験番号115番！受験生のリスナー！実技試験の内容をサクッとプレゼンしていくぜ！アユーレディ！」

実技試験の内容は10分間の【模擬市街地演習】

道具の持ち込みは自由。各自指定のA、B、C、D、E、Fの試験会場に移動。

演習場には三種類の仮想敵が多数配置されている。

それぞれの「攻略難易度」に応じてポイントが設けられる。それを自分の個性で行動不能にしてポイントを稼ぐのが目標だ。

アンチヒーローなどの行為はご法度。

配られたプリントを見ながら説明を聞いていると突然一人の受験生が立ち上がった。

「質問よろしいでしょうか!? プリントに記載されている四種類目の仮想敵についてです！これに関する説明がなく、もし誤載ならば恥ずべき痴態どうゆう事か説明を求めます！ついでにその君！そう緑髪の君だ！さつきからボソボソと気が散るじゃないか！物見遊山なら立ち去りたまえ！」

緑谷くん！何をしているんだー！というか、そんな後ろにいたのか！

緑谷くんは笑われながら小さく謝っており、それと同時にプレゼンマイクからの返答もプレゼントされる。

「オーケーオーケー！その受験生ナイスお喋りサンキュー！説明すると、この四体目は、OPのお邪魔虫だあああああ！」

プレゼンマイクの言葉が会場に響き渡る。この四種類目の敵はOPで倒すのはほぼ不可能。各会場に一体ずつ配置され大暴れしているギミックだそうだ。

最後にプレゼンマイクから雄英の”校訓”をプレゼントされる

「かの英雄ナポレオンⅡボナパルトは言った。『真の英雄とは人生の不幸を乗り越えていく者』と。更に向こうへPlus Ultra!! それではみんな良い受難を！」

そう言ってプレゼントマイクの説明は絞められた。

P.
S.
母さん、父さん耳がつぶれそうです。
いやつぶれました。

第2話：壁さんよお相性が悪かったみたいだな。ここは通してもうぜ、たとえその跡がどんなに汚れていようとな

指定された試験会場に移動しながら、実技試験の事を考えていた。
「Plus Ultra・・・か。やってみせるさ！自分にできることを精一杯。いつでもこい。」

その時アナウンス音声が届いた。

「ハイスタートー！」

開始の鐘は鳴った。

さあ、ヒーローになりに行こう。

俺の前に立ちはだかるは1Pヴィラン。

やる事は1つ、機械であるなら必ずこれは使われているはず。

「鉄：粉末化」

その瞬間、1Pヴィランは虫食いのように倒れていった。

この瞬間悟った。この試験俺との相性が・・・良すぎると。ロボット様様、だが容赦はしない。次々つぶしていこう。そこからは、ヴィランが目に入る度に同じ言葉の繰り返し。ただし、調子に乗りすぎないように。また、両親に迷惑を掛けたくない。

5分経過

「鉄：粉末化。これで、52点くらいかな。倒すのはこれくらいにしておこう。」

それから、怪我している人がいれば、道端に落ちていた布を

「絹：無菌状態」

こうして包帯にして、止血も行っていく。

「これでよし、あくまで応急処置だからあとで救護室に行っておいて。」

「ああ、ありがとう。これで何とか動けるよ。」

そういつて、何人目かも分からない学生を助けてから、少し周りが

静かすぎることに違和感を持った。

「嫌に静かだ。集団から離れたか？」

そんなことを考えていると奴は現れた。

ビルの陰から、ビルを壊しながら、某超大型巨人を思わせる出方で、それは現れた。

周りのビルが霞むほどの巨体、圧倒的脅威

ステージギミックと言われたお邪魔虫、そういうには凶悪過ぎる巨大ロボット、OPヴィランが現れた。

「いや、でかすぎだろ。」

所少し離れて、OPを見た受験者達の反応は共通していた。皆背を向け走って逃げた。そうで無いものは数人、足がすくんで動けない者、OPが破壊した道路の瓦礫に足を取られ動けない者、しかし、そんなのはごく少数。その少数に理は入っていなかった。だが皆とは理由が少し違った。

「あんな、無作為に走ったら、怪我、するじゃねえか。」

そう、けが人の発生に対してであった。倒せはするが、その前にけが人が出ては元も子もないと考えたのである。

そう言いながら走っていると、案の定、コンクリートに足が挟まれた立ち上がれない女子生徒を見かけた。

「言わんこつちやない。おい、大丈夫か。」

「うわああ〜〜〜ん。もうだめ〜。足が動かない〜。」

「諦めるな。コンクリート：粉末化。よし、これで足の重りはなくした。足はどうだ。つま先の感覚は？」

「ひつく。ありが、ひつく、とう、ひつく。でも、ひつく、うごきそうにない〜。おぶって〜〜〜！」

「ああもう、分かった、分かったから。泣くな、ほら背中貸すから。」

「あり、ありがとうお。」ずびい〜〜〜。

「おい、誰も背中で鼻をかんていいとは言っていないぞ。」
ずびい〜〜〜

「聞けえええええ！」

そのときだった。

OPウイルスが何かの衝撃に破壊されて倒れ始めた。よく見ると、緑のもじやがみが宙に浮いているような。ってあれ？どこかで見ただことあるようなあ？そう、今朝の校門と言い、実技説明会でも見たような・・・

緑谷くーーーーーん！何をしているんだああああ！何なら腕ぐちやぐちやじゃないですかああああ!?

そう思うと同時に、背中に女子学生を背負っているのも忘れ、全力で走っていた。そう、落ちる緑谷くんに向かって。親方、空から男の子が！とか呑気に言ってる場合じゃない。あの様子じゃ着地も儘ならない。

道中に、大きめの布を拾って緑谷くん予測落下地点に到着。着地まであと目測30m、間に合え。そう思い俺は、拾った布に個性を掛ける。

「布：無菌化、重ねて布：重力無力化」

これにより、地上4m地点に空飛ぶ絨毯のように布が浮き、緑谷の落下を待ち受ける。

だがしかし、そこで気づいた。近くに校門で会った女子学生がいたことに。よく見ると、緑谷くんに手を伸ばそうとしている。あの距離ではギリ届くくらいだろうか。そして、落ちてきた緑谷くんに対し

て、少女はある意味全力のビンタを放ったのだった。効果は抜群のようだ。いや、ダメージでもあるが、触れた瞬間に緑谷くんは宙に浮いていた。どうやら、空飛ぶ絨毯は不要だったようだ。

「よかつ・・・た・・・」

そう言つて、ビンタ少女は地面にキラキラの昼飯が混ざった液体を流したのだった。

そして、緑谷くんは改めて落下したので、やっぱり空飛ぶ絨毯が再利用されたのだった。

さらに、背負っていた少女は目を回して俺の背中で涙を流しながら吐いているのだった。

それを、おれは見ている事しかできなかつた。

「タアームアップ!!」

こうして、終始順調、締めはカオスな実技試験が終わつたのだった。

控室に行ったら、この服は捨てよう。

第3話：あんな汚れた過去は俺には存在しなかった。
さあ、ようやくスタートラインだ、準備はいいか？ T
a k e y o u r m a r k ! !

雄英の入学試験から早くも1週間の月日が流れた。

あのあと、白衣の老婆が来て、緑谷くんには天使の口づけをしてから、背中の少女と緑谷くん、あと、嘔・キラキラ少女改め、麗日さんを空飛ぶ絨毯に乗せて救護室に運んでから、帰宅したのだった。

その晩、夕食の時、父さんから試験はどうだったか聞かれて筆記はまずまず、実技では自分のやったことを説明した。

「なるほど、分かった。むっ、ちよちゃん、醤油を取ってくれ。」

「はい」

「ありがとう。しかし、雄英の試験方法も嫌なやり方だ。」

「え?」

「実技試験だよ。その方式ではヒーローに求められるのは戦闘力だ、ということになる。でもな、現場に出れば分かるんだよ。力だけで何かを成そうとするのはヴィランのそれと同じだ。昔のちよちゃん、つヴン、母さんのように非戦闘系の個性でヒーローの力になれる者もいる。だから、理忘れるな。ヒーローの職務は自分にできることを全力で行うことだと。それをできる人が皆からヒーローと言われるようになるんだ。」

「・・・分かったよ、父さん。」

その後深夜2時、睡眠中にトイレに行きたいと思ったりリビングの前を通ると、父さんが1人で晩酌をしながら静かに涙している所を見た。・・・何かあったのだろうか。

後日、緑谷くんと学校であった時にお礼を言われた。

「いやいや、あれは俺ができることを全力でやっただけだから、当然のことをしたまてだよ。それより、高校で会ったら、よろしく。」

「うん、僕は受かるかどうか分からないすれすれだけど、合格したらよろしくね!」

緑谷くんと別れて、後輩達が俺達卒業生のために歌の練習などで忙しそうにしているのを見て、送られる側も意識し始めた2月の終わり、いつものように学校から帰ると母さんがパタパタと音を立て、エプロンで手を拭きながら出迎えてこう言った。

「おかえりなさい、雄英から手紙来てたわよ。緑谷くんと爆豪くんの家にも郵便屋さん行ったみたいだから、今度結果聞いてみたら?」

「ただいま、ようやく来たんだね。そうだね、あとで連絡してみるよ。手応えはあったんだけどなんて書いているかな?」

「お父さんが帰ってきてから空ける、それとも先に空けちゃう?」

「父さんを待つよ、合否も気になるけど、受かったら受かったで父さんにお願ひしたいこともあるから。」

「分かったわ。父さん今日はデスク担当らしいから、帰りは18時頃かしら。それまでにお風呂済ましちやいなさい。」

「分かったよ。それじゃ、お風呂溜め始めるね。」

俺はそう言っただけで母さんから雄英の校章が入った封筒を受け取って風呂溜めボタンを押してから、俺は自分の部屋に入った。

風呂から上がると、父さんが帰ってきていた。

「おかえり、父さん」

「ああ、ただいま。雄英から手紙来たんだってな。どうだった?結果。」

「まだ見てないんだ。家族みんなで見たいと思ってさ。」

「そうか、なら今から見るとしようか。リビングで待っているよ。」

「こつちも体拭き終わったらすぐ行くよ」

そうして、封筒をもってリビングに行くと父さんと母さんが待っていてくれた。

「来たか」

「早く開けましょう、理」

「今から空けるから、ちよつと待って。」

そう言っただけで、一息ついてから封筒を開く。中には数枚の資料と平た

く丸い装置が入っていた。それには小さいスイッチが付いている。押すのかな？

そう思いながらスイッチを押すと・・・

『私が投影されたあ!!』

No. 1ヒーロー”オールマイト”が投影されたのだ。

「なぜオールマイトが？」

父さんが一言つぶやくと

『なぜ私がこんな所に居るのか気になるよね!!その理由は私が雄英に教師として務める事になったからさ!!H A H A!!』

流石の俺もオールマイトの爆弾発言に驚きを隠せなかった。父さんも

「これは、エンデヴァさんが荒れるな。」

「そうねえ、焦凍くんを預けるんだものねえ。」

懐かしい名前が聞こえて来た。あいつも雄英なのか。元気にしてるかなあ。

『さてさて、時間もあまり無いことだし結果発表を行つていこうか！まずは筆記試験は何も問題は無かったよ！そして、実技試験は敵ポイント48ポイントだ！敵ポイントは全受験生で2位の成績！いや、素晴らしい!!』

自己カウントよりも少ないな。どこかで計算くるつていたかな？危ない危ない。

『だがしかし、受験生に与えられるポイントは敵ポイントだけにあらず！実は審査制の救助活動ポイントもあった。』

「ほう。」

『我々雄英が見ていたもう一つの基礎能力！救助ポイント。君の場合、後半は救助に徹している所作がよく見られた。特にOPヴィランから逃げる学生たちを助ける姿勢。その結果審査で勝ち取ったポイントは、敵ポイント48ポイント、救助ポイント32ポイント、合計80ポイント文句無しでの1位での合計だ!!世野少年…君は間違いなく今年の新入生でトップになる事間違いないだ！さあ共に学ぼうぜ！ここが君のヒーローアカデミアだ!!』

「よかったじゃない、理。合格よ！」

「これからが、大変になるな。」

「ありがとう、父さん、母さん。」

書類もあつたが同様のことが書かれていて、入学説明会も3月上旬に行われると書かれていた。

「そういえば理、お父さんに頼みたいこと、あつたんじゃないの？」

「俺にか？」

そう、これが父さんと一緒に見たかつた理由。

「うん。父さん、これからヒーロー科に行くにあたって、ヒーローのいろはって言うのを教えてもらいたいんだ。」

「それなら学校に行けば習うことができるだろ。」

「それじゃあ、ダメなんだ。俺にとつてのヒーロー。理想のヒーロー。それは、エンデヴァ事務所所属サイドキック。ヒーロー：ラウンドラップに聞きたいんだ！」

「それは、お前が俺の息子だからか？」

「違うとは言いきれない、僕にとつて初めて見たヒーローは父さんだったから。でもいまは、1ヒーローの卵として聞きたいと思ってるんだ。」

「……分かつた。なら、明日の夜から俺の仕事が終わってからやるとしようか。現場でのリアルな声と学校での教えは必ずしも同一とは限らない。テストで戸惑うことになる恐れもある。それでもいいのか？」

「もちろん。」

少しピリツとした空気が流れる。これからは父さんが命を張っている世界に共に行くのだ。当たり前と言えば当たり前かもしれない。そんな仕事の空気が流れている中、

「さあ、それじゃ今日はおめでたく合格の祝宴としましょ。」

ふわりとした母さんの言葉は家族への空間に戻す力になった。

「ちよちゃん、今日はボトルを開けよう」

「もう、飲み過ぎないようにしてくださいね。」

なんだかんだ言つて、息子の合格は嬉しいのが父親である。

・・・

時はさかのぼり入学試験後の教務部

雄英高校ヒーロー科の会議室では、雄英の校長や教師陣が参加する重要会議が行われていた。

「実技総合成績が出ました」

前方の大画面に受験生の名前と成績が上位からズラリと並ぶ。それを見た教師陣から声が複数上がる。

「救助ポイント0で2位とはな！」

「後半、他が鈍っていく中、派手な個性で敵を寄せ付け攻撃し続けた。タフネスの賜物だ。」

教師達が注目しているのは爆豪勝己。敵ポイントのみで2位になった存在だ。

「対象的に敵ポイント0で8位」

「アレに立ち向かったのは過去に居たけどぶっ飛ばしちやたのは久しく見てないわね」

「思わず、テンション上がっちゃったからなー」

「こちらは緑谷出久である。」

「そして、1位の彼が」

「敵ポイント48、救助ポイント32で敵・救助ともにバランスよく合格した子ね。とても好みだわ!!」

「試験開始直後、遭遇した敵を難なく倒しそこから無双状態ね。救助を見るからに個性の扱い方も上手いです。この映像を見てください」

画面には、粉を落としながらロボが崩れていく姿、またある画面には、コンクリートを砂状にして救助している姿が映っていた。

「このときは、皆と一緒に逃げ出したと思っただわね。」

「自分には無理と考えるまでは皆と共通、その中で自分にできることを常に考える姿勢、人のために行動している事が伝わってくるね。実に合理的な思考経路だ。」

「相澤君がそんなことなんて珍しいね。」

「俺だって褒める時はありますよ。」

「それでもさ。」

「だが・・・」

「だが？」

「一方で危うい思想だ。彼の場合は個性の反動から考えると自己犠牲の精神が強すぎる嫌いがある。」

少し、相澤先生が不服そうな顔をする。

「そこは、これから僕達が教えていけばいいじゃないか。まだ学生。至らない所はあつて当然さ。」

「確かにそうですが・・・、人の根っこを変えるのは中々難儀なことだと思えますね、俺は。」

「まあ、その時はその時だよ。それじゃ、今年の首席は世野理でいいね？」

「異議なし」

教師一致で世野理の首席合格が決まった瞬間であつた。ただ一人相沢消太を除いて。

第4話：新入生代表の挨拶あるじゃないですか？あれ俺の所に来なかったんだけど誰が読むことになってんだろうね、即時対応がヒーローには大切とかで急に読めとか言われないうね？

寒い冬を乗り越えた生命たちが活動し始める暖かな季節、春。桜の並木道が、新しい生活を迎える学生たちを暖かく包んでいる中、理は一足早く誰もいない教室にて皆を待っていた。

「少し早く来すぎたかな？暇だし……これでもやるか。」

そう言つて理が机に置いたのは、250mlペットボトルに入つた水とストップウォッチ。ストップウォッチのスタートボタンを押してからペットボトルの水を机の上にぶちまけると、理は個性を使い始めた。

「水：球体化」

途端に水が1つのボール状になりはじめ、

「水：円錐」

円錐を形作り、

「水：円盤」

薄い一枚ものの水板が出来上がり、

「円盤：分裂」

そう言つと、1枚当たりの質量が減つたが、1枚の円盤が2枚になつた。

「水：固体化」

そうして、1枚の氷板ができた。

「ここまでで8秒、まだまだだな。」

ストップウォッチのタイムを確認し、仕上がりを確認しているとドアが開く音に反応すると、眼鏡の少年が入ってきた。確か、彼は実技説明の時に挙手していた男の子ではなかったか。

「おはよう。」

「おはよう。早いな、俺も早く来たつもりだったんだが」

「いや、早く目が覚めてしまつてね。」

「その気持ちは分かるぞ。俺も合格が決まつてから今日まで興奮してしまつてね。そうだ、自己紹介が遅れたな、飯田天哉だ、これからよろしく頼む。」

「飯田くんだね、俺は世野理。こちらこそよろしく。」

男同士の熱い握手を交わしてから、放置していた氷板について飯田くんが聞いてきた。

「後ろで溶け始めている氷はいいのか？」

「あつ！忘れてた！すぐに元に戻すよ。」

「ならこのハンカチを使つてくれ。」

「ありがとう、けど大丈夫。気持ちだけありがたく受け取っておくよ。」

氷：液体化、水：円柱、解除」

言い終わると同時に、水はペットボトルに水道の蛇口から出た水のように吸い込まれていった。

「水の操作系個性なのか？便利だな。」

「いや、無機物なら何でもだ。ただ質量は保つたままだから、盾とかだと大きくしたらその分薄くなつてしまうんだ。」

「そうなのか、いやそれでもいい個性じゃないか。」

「ありがとう。父さんと母さんからもらった個性だからね、誇りに思つているんだ。」

そんな風に飯田君と話していると続々と生徒が入ってきて……おや？爆豪くんが入ってきてきて？椅子に座つて？足を机に置いたああああ！

「む、すまない。少しいいかな？」

「ああ、爆豪くん？」

「知っているのか？」

「同じ中学なんだ。去年報道されてたヘッドロヴィランでも有名になつたかな？」

「去年のあれか、いや、今はそれより机の制作者への感謝を忘れたあの姿勢を指摘しなければ。」

そう言つて、飯田くんは爆豪くんのもとに行つてしまった。さて、

俺はどうしようか。

「ねえ、ちよつといい?」

「うん?」

呼ばれた方を振り向くと、試験の日に出会った耳郎さんがいた。

「やつぱり、理だった。覚えてる? 私的事」

「耳郎さんだよ。君も受かったんだ。これからよろしくね。」

「こつちこそ。あれ、すごいね。」

そう言っただけなのは、やはりと言うべきか爆豪くと飯田くんの所だった。

「あはは、あれはたぶん水と油レベルに合わないだろうね。」

「初めて見ただけでも分かるわ。ドレッシングみたいに大きな衝撃が無い限り合わないだろうね。」

「さ、さすがにそこまでではないと思・・・願いたいなあ。」

そんな水と油な2人の会話はエスカレートしてきたのかどんどん声が大きくなってきて少し離れたここまで聞こえ始めた。

「机に足をかけるな! 雄英の先輩方や机の製作者に申し訳ないと思わないか!」

「思わねえよ! テメーどこ中だよ? 端役が!!」

「ムツぽ・・・俺は聡明中学校出身、飯田天哉だ。」

そんな中扉の鳴る音が聞こえて振り向くとそこには緑谷くんがいた。おう、このタイミングで緑谷くんが来るとは。いきなり爆豪と眼鏡の人が教室の中で喧嘩をしている光景を目の当たりにして出久は目が点になっているようだ。そして後ろにも誰か来ているぞ、早く進まないと聞えるぞ、緑谷くん!

「ああ、そのもさもさ頭は!」

どうやらキラキラ少女が来たようだ。あの2人にもあいさつしに行こう。

「緑谷くんも一緒か。」

「知り合い?」

「同じ中学なんだ。あと爆豪くんもね。あんまり関わったことは無かったけど。行ってきてもいいかな?」

「いいよ、私は席に戻っておくからさ。」

耳郎と別れて俺は緑谷くんたちの輪に入りに行こうとした。

「麗日お茶子だよ」

「緑谷君に麗日君だね。それにしても、緑谷君、きみはあの試験の本質を理解していたんだね。悔しいが、君の方が1枚上手だったようだ。」

「やあ、緑谷くん、麗日さん。同じクラスみたいだね。」

「世野くん！よかった君も同じクラスになれたんだ。」

「ああ！空飛ぶ絨毯の人！よろしくね！」

「お友達ごっこしたいなら他所へ行け。ここはヒーロー科だぞ」

お話をしていると急に低い声が廊下から聞こえて来た。そしてその場には、寝袋が転がっていて、顔だけが見えている。

男性は壇上まで歩いて行って、

「ハイ。静かになるまで8秒もかかりました。時間は有限。君達は合理性に欠くね」

静かになった事で寝袋に包まれていた男性が名乗りを上げた。

「俺は担任の相澤消太だ、よろしく。早速だがこれ着てすぐにグラウンドに出ろ。」

相澤先生から言われた通り、着替えるためにロッカーに向かいながら理は考えていた。

どうして、入学式なのに体操服なのか？そういえば自分は首席だと言われていたのに入学式でやる新入生代表の宣誓の練習もなかった。そして周りには自分達以外の学生が見当たらない。

「何かある。」

そうとしか思えない。そんな気持ちを抱えたままグラウンドに集結すると先生が言い始めた

「全員集まったな。では個性把握テストを開始する。」

「個性把握テスト!?!」

「入学式は？ガイダンスは？」

「ヒーローになるのにそんな悠長な時間ないよ。雄英は自由な校風が売り文句。中学まではあっただろう？個性無しの体力テスト」

気だるげに相澤先生は説明をし始めた。

種目は全部で8種目。

ソフトボール投げ

立ち幅とび

50m走

持久走

握力

反復横とび

上体起こし

長座体前屈

「入試の成績トップは世野だったな。んで、2番が爆豪か。……」
爆豪、中学ではボール投げいくつだった？」

爆豪は2番という言葉にイラつきながら答える。

「67m」

「個性使っていいから思いつきりやってみろ、円から出なきや何してもいい。はよ、思いつきりな」

ボールを受け取り軽く肩を回しながら爆豪は円の上に立った。

「死ねエ!!!」

大きく振りかぶりボールを爆破と共にリリース。爆風に乗ってボールは空高くへと飛んでいく。

死ねとは如何なものか。爆豪はそんなことを気に留めない。

「まず自分の『最大限』を知ることだ。それがヒーローへの下地を作るための合理的な手段……」

相澤先生は通常の体力テストでは見たこともない705.2mと表示されたスマホを示す。

それを見た生徒たちは、面白そうと色めき立っている。

「面白そう、か。ヒーローになるための3年間、お前らはそんな腹積もりでこれから望んでいくのか？よし、トータル成績最下位の見込みなしと判断してまあ、除籍処分にしよう」

「除籍!?まだ入学初日ですよ!?!初日じゃなくてもひどすぎる!」

キラキラ少女改め麗日さんが意見を言う。しかし相澤先生は毅然

とした態度を崩さずにこう言った。

「自然災害、大事故、身勝手なヴィラン達。いつどこからかわからない厄災相手に立ち向かっていくことになる。今の世界は理不尽に塗れてる。そういう危機を覆していくのがヒーロー。これから3年、雄英は君たちに全力で理不尽という壁を用意する。」

さすがというべきか、雄英高校。予想外の形で壁を落としてくるな。そんなの乗り越えてやるさ、これがヒーローになるために必要だというのなら。

「さらに向こうへ、Plus Ultraさ。全力で、乗り越えてこい」

見せてあげるよ、相澤先生。父さんとの特訓成果を。

あと、早く焦凍くんに話しかけたいんですけどお。なんだか目が昔より暗くないですかあ。それと爆豪くんあまりこっち睨まないでえ。

第5話：己の限界を把握しろ！知恵・体力すべてさらけ出せ！何ならついでに限界超えてみせろ！体力テスト改め個性把握テスト開始だオラアア!!

個性把握テスト。国が定めた体力テストを個性を使って全力の数値を出す。見込みが無ければ除籍処分。そんなの関係ない。自分ができることを全力で。いつもと変わらないじゃないか。

50m走

ここは普通に走るしかないか……いや、ここは。

「隣、よろしくね。」

「うん、よろしくね。」

と返事をしたがそこには体操服が浮いているだけ。ポルターガイストですかあ！

「あ、あたしの個性：透明化だからさ、気にしないで。」

「なるほど、ひと目見ただけだと服が浮いているみたいでびっくりしたよ。」

「あはは、よく言われるんだあ。お互い頑張ろ！」

きつと前でガッツポーズしているのだろう。腕の部分が体の前に出てくる。

「うん、頑張ろう！」

そう言ってスタート位置についた。

『位置について、よいい、ドン』

理は踏み込むと同時に足元を見ながら個性を発動した。

「靴底：車輪」

すると、靴底の外側だけがローラースケートのように車輪に変形していた。

『4. 57』

「よし！解除！」

記録4. 57秒

握力

ここは、どうしようもないかな。普通にやろう。

記録：90kg

立ち幅跳び

靴をバネにしたらどうなるのだろうか？

1回目

飛ぶと同時に

「靴底：バネー」ビターーン!!!

個性発動と同時に、その場に前のめりに倒れてしまった。どうやら普通の運動靴だと十分な大きさにならず不安定で力も生み出せないようだ。これは仕方ない、普通に飛んだ方が良さそうだ。

最終記録：1m85cm

反復横跳び

ブドウ頭の少年が面白い方法で記録を伸ばしていたのを見たから、少し真似させてもらおう。

『スタートー!』

機械音の開始の合図とともにまずは、靴をローラースケートに変化させて、それから下にある3つの線の両端の床に個性を発動させる。

「床：円柱」

すると両端に手の高さまでのポールが出来上がった。後は、両手でポールを押しあうだけだ!

記録：85回

ソフトボール投げ

この競技はどうだろうか。悩んでいると麗日さんが無限という記録を叩き出していた。どうやら落ちてこないボールには無限の記録がつくようだ。ならばやることは決まった。

「次、世野」

「はいー」

ボールを手に円の中に入る。ボールを下手投げでゆっくり宙に投げ出す。どうやら皆驚いた表情をしているようだ。当たり前だ。皆遠くに投げるため、大砲なんかを生み出した女の子以外、上投げで投げていたんだから。でも、俺の個性の場合、ゆっくり目に入れたいか

らこつちの方がやりやすいんだ。

「ボール：重力無力化」

すると、落下軌道を描いていたボールが個性がかかると同時にそのまま地面に水平に進み始めた。

「世野、あのボールはいつまで浮かせられる?」

「2日3日はいけます。」

すると、相澤先生が少し目に研を宿しつつ聞いてきた。

「個性の反動は?」

「あのサイズのボールなら特に問題ありません。反動が出るサイズは自分でも把握しています。」

血流で問題が出てくるサイズは、父さんとの特訓で戦車位の体積まではいけるようになったからボール一つ位は問題ない。

「そうか、ならいい。記録は無限にしておく。」

「2連続無限きたあ!!!」

上手くいって良かった。相澤先生も俺の個性をよく知った上で聞いたのだとしたら良い先生だと思う。そんなことを考えていると、緑谷くんの暗い表情が目に入った。

「大丈夫かい? 緑谷くん。良かったらお兼室に行くかい? 先生に話をつけておくけど。」

「ありがとう。大丈夫だよ。ただ、記録がね。あんまりよくないんだ。僕、増強系の個性なんだけど調整が難しくって、個性を使うと使った部分がダメになっちゃうんだ。」

個性のリスク、俺と同じか。何とか力になってあげられないかな。「それはまた、ピーキーな個性だね。といつても俺の個性も使いすぎると血液の流れ止まっちゃって死の危険があるんだけどね。」

「命の!?!」

「そ!で、初めて発現した時に使いすぎて1回心筋梗塞で病院に運ばれたことがあるらしいんだよねえ。まあ、その時の記憶ないし、今までそんな事も無かったから実感ないんだけどさあ。」

「そ、そうなんだ。」

「だからさ、個性のリスクで困っている緑谷には何かシンパシー感じ

るからさ、何か力になれないかなって。ある意味リスク持つ先輩にあたる訳だから、何か聞きたいこととかあるかな？」

「あ、ありがとう。えと、それじゃあ理君は個性の調整ってどうしてるの？」

「俺の個性は体積が大きい程負荷が掛かるらしいから、部分部分にかけて負荷を分散してる感じかな？例えば、今回のボール投げだったらボールが離れる瞬間だけ個性を発動するとかになるかな。」

「使う部分にだけ……そうか！ありがとう理君。何かいけそうな気がするよ。」

「ああ、力になれたなら幸いだよ。」

「次、緑谷。早くは入れ。」

理と緑谷が話し終えた時、丁度相澤先生から呼び出しが掛かり緑谷は円に向かっていく。

「使う部分にOFAを使えばいいんだ。ボール投げなら右腕。いや、それだけじゃ後の競技に差し支える。どうするどうするどうする？」
(緑谷くんどこに個性を使うか悩んでいるな。俺ならどこに使うか。投球は全身運動、特に下半身が大切になってくる。それを考慮すると、全身の関節に発動していつて、最後の指先で100%になるようにするかな。)

考えていると、緑谷も考えが浮かんだのかボールを投げた。が、記録は46mであった。増強系はどこに行った？

「どうして!?確かに個性を使おうと！」

「個性を消した。つくづくあの入試は……合理性に欠くよ、お前みたいな奴も入学できてしまう。」

緑谷は何かを思い出したように

「消した……!!あのゴーグル……そうか……！抹消ヒーローイレイザー・ヘッド!!!」

「イレイザー？俺知らない。」

「聞いたことはある。メディア嫌いのアングラ系ヒーローだよ！」

相澤はさらに畳み掛けるように緑谷に言った。

「見たところ……個性を制御できないんだろ？世野と話して何か考え

があつたようだが、それじゃあ変わらない。また行動不能になって、誰かに助けてもらうつもりだったか？」

「そつ、そんなつもりじゃ…！」

相澤は首に巻いている捕縛布で、緑谷を近くに引き寄せ、小さな声で何かを話し始めた。理にはよく聞こえなかったが、ただ緑谷除籍の危機であることだけは感じ取ることができた。

「指導を受けていたようだが。」

「除籍勧告だろ。」

飯田くんと爆豪くんが話しているが、君たち教室での険悪ムードはどこに行つたんだい？何かをぶつぶつ呟き続ける緑谷くんの表情にはまだ策があるのかないのかは分からない。でも、入学初日に緑谷くんとさよならだけは避けたい。

「頑張るんだ！緑谷くん！」

気づけばそんな声が出ていた。

（一度右腕の関節だけでやってみたけど、それだとまた相澤先生に止められてしまう。なら範囲をもっと狭く、絞つて。指先だけならどうだ！ケガしても残りの競技に支障もないはず）

どうやら緑谷には届いていないようだが。

「じゃ、2回目な。個性は戻してあるから。」

そして先ほどと同じように思いつき振りかぶり……

「SMASH!!」

かけ声と共にボールは天を昇る。

「よしー！」

思わず理はガッツポーズをとる。結果は700mを超えていた。記録が分かるや否や、爆豪が「クソデクウ!!」と言いながら地団駄を踏んでいた。

「先生……！まだいけます！」

緑谷は目に涙を浮かべ、痛いであろうおかしな方向へ曲がった人差し指を無理やり握り込み、相澤先生に宣言する。相澤は目を見開き「こいつー！」と笑っている。しかしそこに水を差す声が現れた。

「どういふことだクソデク!!説明しやがれ！」

ヒルな笑みを浮かべて一言言い放った。

「ちなみに除籍はウソな。君らの最大限を引き出す、合理的虚偽。」

生徒達の反応はほぼ一色となった。

「二はー！二はー！？」

先生は俺たちクラスを一丸に刺せるのが本当に上手なようだ。

「あんなのウソに決まってるじゃない、ちよつと考えればわかりますわ……」

相澤先生はその言葉に乗る形で

「そゆこと。これにて終わりだ。教室にカリキュラム等の書類あるから目え通しとけ。それと緑谷、保健室ではあきさんのとこ行って治してもらえ。明日からもつと過酷な試練の目白押しだ。覚悟しておけ。」

そういうと相澤先生は校舎に戻っていった。除籍は嘘、合理的虚偽、その言葉が本当なら一杯食わされた形になるが、緑谷くんに放っていた言葉は本気だった。もしかした除籍もあり得たかもしれない。これから緑谷くんは大変になるな。でも今は喜んでいいだろう。

「緑谷くんよかったね。除籍にならなくて。保健室一緒行こうか？」

「ありがとう理君。でも大丈夫。歩くことはできるから1人で行くよ。」

「そつか、じゃあ一緒に帰りたいたいし教室で待ってるよ。駅に行くでしょ？途中までは一緒だし。」

「分かったよ。それじゃあ少し待ってて、なるべく早く戻るから。」

緑谷くんはすぐに保健室に向かっていった。なら俺も早めにおける準備しておこうかな。

帰り道

「保健室行ったのになんか疲れてない？緑谷くん」

「リカバリーガールの個性、相手の自然治癒力を使うらしくて」

「なるほど、体育の後にはあまりお世話になっても意味なさそうだね」「ケガするのって身体動かしている時しか起きないよね？」

「緑谷君身体は大丈夫か？」

緑谷くんと他愛ない会話をしながら帰っていると、後ろから緑谷くんの肩に手を置きながら、聞きなれた声が聞こえて来た。

「飯田君！ありがとう、リカバリーガールに完全に治してもらったからもう大丈夫だよ。」

「そうなのか、ならいいんだが。しかし相澤先生にはやられたよ。これが最高峰と違ってしまった。」

「嘘ならいいんだけどね。」

「む、世野くん。君は相澤先生の言葉が本当だったと言いたいのかい？」

「理でいいよ。うん、少なくともボール投げの時の相澤先生の緑谷くんに掛ける言葉は本気だったと思う。」

「えっ？」

俺が考えを言うのと緑谷くんの顔が蒼白になり始める。

「でも、最終的に落とさなかったってことは、緑谷くんにも見込みがあると思つたつてことなんだよね。言つてたじゃない？『見込みのない奴は除籍処分』つて。これはこれで、緑谷くんはすごいと思うよ。言つて見れば先生からお前はヒーローになれるつて言われてるのと同じになるんだからさ。」

「すごいじゃないか、緑谷君！——」

「皆——、駅まで——？一緒にかえろ——！」

「違う！キラキラ少女だ！」

「どつちも違うよ！麗日お茶子です。飯田天哉君に、世野理くん、緑谷デクくんだよね？」

後ろから満面の笑みでキラキラ少女改め、麗日さんが走ってきた。

「デク！」

「あああ、それ爆豪くんが呼んでたから？」

「そうそう、違うの？」

確かに、緑谷くんのこと名前で呼んでいる人入学してから聞いてなかったから間違えても仕方ないか。

「あの、本名はイズクで、デクはかつちゃんか馬鹿にして。」

「なるほど、蔑称か。」

蔑称だったのか、あれ。何と掛けてそうなるんだよ。

「ああそうなんだ。ごめん。でもあたしは好きだな、頑張れって感じがして。」

「デクです!!」

緑谷くん、良いのかそれで!?

「マズいぞ、蔑称なんだろう!」

「コペルニクスの転回・・・」

「コペ・・・?」

緑谷くん、麗日さんに対して赤面しているじゃないか!それにしてもその単語を日常生活で聞く日が来るとは。

「あれ?理じゃん」

「耳郎さん?・・・と、えつと?」

「八百万百です。世野理さん。」

「ごめん、覚えてくれてたんだ。八百万さん、よろしく。」

「こちらこそ。それより何を話しているんですの?道の真ん中で立ち止まるのは少しばかり目立つと思うのですが・・・」

「それもそうだね、ほらお三方、電車の時間は大丈夫なの?」

八百万さんに言われてから、皆で駅に向かって歩いてしていると我が家が見えて来た。どうやら母さんが玄関で待っていてくれたようだ。

「おかえりー、理ー。」

「あれ?理君の家この近くだったっけ?」

緑谷くんから質問が飛んできた。同じ中学だった緑谷くんからしたら驚きだろう、同じ校区だったのだから。

「いや、入学に合わせてこっちに引っ越すことになってね。ただいま、母さん。」

「皆学校のお友達?大所帯ね。そうだわ!もしよかったらうちでご飯食べていかない?」

突然の母の提案に皆びっくりしている。

「母さん、今日は入学初日だよ?皆家族と予定があるはずだよ?」

「あら、それもそうね。じゃあ、また今度にしましょうかしら。」

「そうした方がいいよ。」

「じゃあ、お母さん先に家に入って昼ご飯の用意しておくわね。皆さくん、理と仲良くしてあげてくださいいね〜」

「分かったから！早く用意しに行つて！」

そうして、母さんが手を振りながら中に入ったのを確認してから、一息ついた。なんとかなかったか。

「ふう、皆ごめんね、母さんが急に変な事言い始めて」

「いや、世野くんのお母さんのご厚意だったんだ、また今度訪れさせてもらおうと言つておいてくれ。」

「ありがとう、飯田くん。それじゃ皆、また明日！」

「「また明日〜」」

そして家に入つて、母さんとご飯を食べ始めた。

今日1日過ごしただけでも、雄英高校でどれだけ濃い学校生活が待ち受けているかが分かる。これからの3年間は大変かもしれない。それでも、ヒーローになるためにはそれを楽しまなければ。その上で、困難を乗り越えていくんだ。そう、Plus Ultraの精神でやっつていこう。

「そういえば理、今日は焦凍くんと会えた？」

忘れていた！

第6話：入学2日目、ヒーローが勉強教えてくれるんだって。憧れのヒーローの授業なんて興奮しすぎて頭に入ってこないんじゃないか？

入学初日の試練を乗り越えた翌日。理たちは朝から高校生らしく必修科目である普通の授業を受けていた。英語や現代文、数学なども英雄ではプロヒーローの教師陣が教えている。英語はプレゼント・マイクが担当。プロヒーローの教室登場時は少しぎわっていたが、内容は普通の授業なのでそこは拍子抜けであった。

昼食は大食堂で、こちらもプロヒーローランチラッシュが作る料理が食べられる。弁当を持ってくる生徒もいるようだが、ごく少数派のようである。ちなみに、理は少数派に分類される母手製のお弁当である。

そして昼休みを終えいよいよ、午後の授業『ヒーロー基礎学』。ついにはらしい授業がついに始まるからか、皆そわそわしていた。

「わーたーしーが！普通にドアから来た！」

オールマイトがチャイムと同時にドアを開けて入ってきた。教卓に立つオールマイトを見ると今年から英雄の教師になった事が事実なのだと分かる。誰が言ったか銀時代の戦闘服らしい。

「私の担当はヒーロー基礎学！ヒーローの素地を作る為、様々な訓練を行う課目だ！単位数も最多だ！」

No. 1ヒーロー：オールマイト。平和の象徴。事件解決数はエンデヴァーに劣るものの、実績は言わずもがな。日本の犯罪係数が低い理由と言ってもいい、ヒーローの1つの完成形。理からしたら父親が理想のヒーローではあるが、オールマイトはヒーローを目指すものなら誰もが一度は憧れる存在であり、それは理も例外ではなかった。

「早速だが今日はコレ！ 戦闘訓練！」

「戦闘！」

「訓練！」

「BATTLE」と書かれた札をオールマイトが突き出すと、皆が色めき立つ。特に爆豪が顕著であり、午前をつまらなそうな表情はどこにもなかった。

「そしてそいつに伴って、こちら!! 入学前に送ってもらった個性届と要望に沿ってあつらえたコスチューム!!」

オールマイトが壁に手を向けると壁から首席番号が掛かれたアタッシュケースが出てくる。あ、俺の番号もあった。結構細かい事書いたけどどれくらい要望通っているのだろうか。

「皆それぞれのコスチュームに着替えて順次、グラウンドβに集合だ！」

◆
被服控除。

雄英高校が個性届、身体情報、デザイン等の要望を基にサポート会社がコスチュームを作ってくれるありがたい制度をいう。

〈理のコスチューム〉

動きに障害が無い上で頑丈性を追求した結果、布地は全てツイストナノケブラー(TNK) 繊維で出来上がっている。さらに、耐火・耐低温・耐電気も追加されている。パンツは動きやすさから紺のニツカポツカに、上はアイテムをたくさん入れられるようにポケットだらけの黒のシャツ、黒字に紺のフード付きジャンパー。あとは、武器にできるようにタングステン鋼の球塊直径15cm。これは少し重いが戦うためにはこれ位ほしい。靴は車輪にできるように厚底ブーツに、踵部分にブレーキ用の出っ張りがついている。小物入れとして腰つきポーチと指ぬき手袋、マフラーがある。ポーチの中には簡単な救急キット(包帯・ガーゼ・テープ)と水(戦闘用水道水と滅菌蒸留水250mlずつ)が入れている。ガス対策のため、マフラーで顔半分まで覆うようにしている。

コスチュームに着替えて運動場に行くとオールマイトが待っていた。

「恰好から入るってのも大事なもんだぜ、少年少女。威嚇するんだ、今日から自分たちがヒーローなんだと。始めようか、有精卵ども！」

周りを見るとみんな個性的な服を着ており、中には被り物のため誰か分からない人もいる。

「理君、そのコスチュームかっこいいね。」

「ありがとう、緑谷くん。君のはオールマイトをオマージュしているのがすごく伝わってくるよ。」

「お二人さん、かっこいいねえ。私要望ちゃんと書けばよかったよ。」

そういう麗日さんの服はパツパツスーツであった。まったく、ヒーロー科は最高だぜ。

「さあ、戦闘訓練のお時間だ。」

フルフェイスロボのようなコスチュームを着た少年が挙手をした。

「先生……ここは入試の演習場ですが、また市街地演習を行うのでしよう!？」

声から飯田くんだと分かる。質問にオールマイトは答えた。

「いいや、もう2歩先に踏み込む！屋内での対・人・戦闘訓練さ!!」

敵ヴィラン退治は主に屋外で見られるが、統計で言えば屋内の方が凶悪敵出現率は高いんだ。

監禁・軟禁・裏商売……このヒーロー飽和社会、真に賢い敵は室内やみに潜む!!

君らには『敵組』と『ヒーロー組』に分かれて、2対2の屋内戦を行ってもらおう!!」

「基礎訓練もなしに?」

と緑がの特徴的な異形型個性の少女―後から聞く蛙吹梅雨さんというらしい―が質問した。

その問いにオールマイトは、ガッツポーズで答えた

「その基礎を知るための訓練さー！ただし今度はぶっ壊せばOKなロボじゃないのがミソだ。」

その答えに、クラスの面々は思い思いの質問をぶつけていった。

「勝敗のシステムはどうなります?」

「ブツ飛ばしてもいいんすか。」

「また相澤先生みたく除籍とかあるんですか...?」

「分かれるとは、どのような分かれ方をすればよろしいですか。」

「このマントヤバくない?」

「んんんく聖徳太子イイ!!!」

そう零したオールマイトは、ポケットからカンペを取り出し更なる説明を始めた。新米教師感丸出しである。

「いいかい?状況設定は敵がアジトに「核兵器」を隠していて、ヒーローはそれを処理しようとしている!」

「ヒーローは制限時間内に『敵』を捕まえるか「核兵器」を回収する事、敵は制限時間まで「核兵器」を守るかヒーローを捕まえる事。ちなみに、コンビおよび対戦相手は、くじだ!」

「適当なのですか!」

飯田くんが思わず叫んだ。気になることは飯田くんが全部聞いてくれる。飯田くん、便利。

それに緑谷は、なだめるように言葉を紡いだ

「プロは他事務所のヒーローと即席チームアップする事が多いし、そういう事じゃないかな...」

「そうか...!先を見据えた計らい、失礼しました!」

「いいよ、早くやる!!」

そして、くじの結果タッグは以下の通りになった。

Aチーム：緑谷出久、麗日お茶子

Bチーム：轟焦凍、障子目蔵

Cチーム：峰田実、八百万百

Dチーム：飯田天哉、爆豪勝己

Eチーム：芦戸三奈、青山優雅

Fチーム：砂藤力道、口田甲司

Gチーム：耳郎響香、上鳴電気

Hチーム：常闇踏影、蛙吹梅雨

Iチーム：尾白猿夫、葉隠透

Jチーム：切島鋭児郎、瀬呂範太

JOKER：世野理

「先生、このJOKERって何ですか？」

「世野少年、君が当たったのか。今年のヒーロー科は2人多く取っていてね。両クラスが21人の奇数になっているんだ。だからタッグを組むとなると1人余ってしまったってね、JOKERはもう一度くじを引いて当たったところに入ってくれ。」

言うや否や、くじの入った箱を出してもう一度引いた結果は、

「Gだ。」

「それじゃあ、Gチームだ！ただし、Gチームは人数が多いから相手にはハンデを与えるぞ。」

「ごめん、耳郎さんと・・・」

「いや、気にしてないからさ、よろしく理」

「上鳴な、どうせ誰かがなるもんっぽいし今回それが俺らだったってことだし。まハンデも何とかなるっしょ。」

「ありがとう2人とも。」

この3人で戦闘訓練か。まず仲間内の個性を把握しなければ。

「それじゃあ、訓練を始めていこうか。まず第1戦は・・・Aチーム対Dチームだ。ヴィランチームは先に入って準備してくれ！5分後にはヒーローチームが潜入してスタートだ。他のみんなはビルの地下室のモニターで観察するぞ!!」

戦闘訓練が、ついに始まる。